

他者の前で泣いた際に喚起される感情 —相手との関係性による差異と性差—¹⁾

木野和代
佐藤美咲
和田瑞穂

悲しく辛い出来事に遭遇した場合に経験される感情は、しばしば泣くという行動として現れる。この泣くという行動は、他者の前では抑制されることが多い。悲しみに限らず、他の感情に関しても、我々は日常生活において感じる感情をそのまま表に表すわけではない。対人場面においては感情表出の制御が頻繁に行われている。

感情表出の制御は一般に、社会性を保つための重要なスキルの一つと考えられ（菊池・堀毛, 1994）、個人が所属する社会で承認されている感情表出の仕方は発達過程で習得されていくものである（e.g., Saarni, 1984）。他者の前で泣くことについては、発達とともに抑制しようと意識づけられていく（橋本・澤田・松尾・武知, 2006）。したがって、社会的な場面において涙を流すことは、感情表出の制御に失敗することを意味するものであり、自分の弱さを露呈し、結果として否定的な評価を受ける可能性がある。

しかし、澤田・橋本・松尾（2006, 2007）は、青年期における泣きについて、感情制御の失敗や未熟な社会性、自己の弱さを露呈するといった否定的な意味のみを有するものではなく、自己と向き合い精神的成長につながる積極的側面を有するものであるとの立場から研究を進めている。また、泣くことの個人への効果としてはストレス緩和効果がある。例えば、泣く際には涙を伴うことがあるが、この涙を流すことにはストレス緩和といった肯定的な心理的变化をもたらす可能性が指摘されている（有田, 2007）。泣くことから連想されるイメージにもストレス緩和という側面が含まれており、さらに感情の明確化という肯定的な側面も含まれていることが示されている（堂, 2012）。

では、泣くことは一人の場合のみに有効なのであり、他者の前で泣く場合は否定的な結果が併存するため、総じて好ましい結果をもたらさないのであろうか。また、一人で泣くことには否定的側面はないのであろうか。橋本他（2006）は一人で泣くことについて、不安・恐れの高く、否定的な評価や恥などを回避する手段として機能する一方で、苦痛を他者と共有できず、サポートが得られないため不安な感情が持続し、精神的健康において好ましい状態といえない側面があるとしている。また、Bylsma, Vingerhoets, & Rottenberg（2011）は、女性の泣

いた経験に関する日記分析により、多数の人の前ではなく、ある一人の他者の前で泣いたときは気分改善を促進することを示している。つまり、一人で泣くことにも否定的側面があり、また、特定の他者の前で泣くことには肯定的側面があることを示唆している。

泣くことは悲しみの表出の一形態である。感情のコミュニケーション機能に着目すれば、人前で泣くということは、他者に自己の悲しみを伝達する手段であり、これにより他者から援助を得る可能性が高まるという対人的機能を有するものである。

このような対人機能を重視した井村・生塩・藤原（2009）は、「泣く」ことを他者との相互関係の中でとらえていく必要性を主張し、青年期において人前で泣くことへの抵抗感や人前で泣いた際の喚起感情について検討している。友人の前で泣くことに限定された調査であるが、この際に喚起される感情として、「気分改善」、「関係悪化への懸念」、「対自的傷つき」の3側面が見いだされている。「気分改善」は、泣くことで気分が楽になり、関係性も深まることを期待するものであり、人前で泣くことの肯定的な側面をとらえるものといえる。他方、「関係悪化への懸念」は、泣くことで友人との関係がぎこちなくなる、気まずくなることへの懸念、「対自的傷つき」は、泣くことで自分自身が傷つく、恥ずかしい思いをすることへの嫌悪感であり、いずれも否定的な側面といえよう。つまり、友人の前で泣くことによる喚起感情を肯定的側面と否定的側面の両面からとらえることが示されている。

先述の通り、泣くことは成長に伴い抑制するように意識づけられるが、実際には青年が他者の前で泣くことは予想以上に多く行われているという（橋本他，2006）。橋本他（2006）の研究では、調査対象である大学生の半数が、他者の前で泣いたエピソードを報告したことが明らかにされている。したがって青年を対象に、他者の前で泣いた際に喚起される感情や自分自身に与える影響、そしてこれらの認識を明らかにすることは、青年期における泣きの様相を解明することに寄与するであろう。

ただし、井村他（2009）の研究では、友人関係の持ち方と泣きの関連を検討することに重きがおかれているため、青年が同性友人の前で泣くことに限定して検討がなされている。そして研究対象の95%以上が女子学生であり、女子青年に関する研究結果であったといえる。つまり、泣く相手が限定的であると同時に泣く本人の性別にも偏りが認められる。しかし、感情表出の制御には、他者の存在や、その他者との関係性が影響することがこれまでも指摘されてきている（e.g., 井上，2000）。さらに、他者の前で泣くことを2者間のコミュニケーション場面ととらえれば、相手が同性か異性かがコミュニケーションの質に影響する可能性がある（Gudykunst & Nishida, 1993）。また、男性は女性よりも悲しみの表出抑制を行い（e.g., 稲嶺・遠藤，2009；井上，2000）、泣くことを抑制する傾向がある（e.g., 澤田他，2006；Van Tilburg, Unterberg, & Vingerhoets, 2002）。したがって、泣いた際の喚起感情に影響を与える要因として、相手（対象となる他者）との関係性、泣く主体（本人）の性別、相手の性別、相手との年齢差

などを考慮した検討もなされるべきであろう。

そこで本研究では、他者の前で泣いた際の喚起感情について、①「対象となる他者との関係性」による差異（研究1）、および、②性差（研究2）の2点について主に検討する。この際、相手の性別を考慮する。なお、泣く理由には多様な状況が想定されるが、本研究では井村他（2009）にならい「人間関係のもつれや失敗・挫折体験といった悲しく辛い出来事によって泣く（p. 58）」状況に限定する。

研究1

「対象となる他者との関係性」により、その相手の前で泣いた場合の喚起感情が異なるのかを女子青年を対象に検討する。対象となる他者は「親しい友人」と「家族」とし、それぞれ同性か異性かによる違いも検討する。

井村他（2009）の研究では青年期において多様な感情を最も共有する対象であるとして、「友人」の前で泣く状況を取り上げている。本研究で研究対象とする大学生が人間関係を取り結ぶ状況は、家庭以外にも、所属大学、学外でのアルバイトやサークル活動など幅広い。そしてこれらの状況でさまざまな人間関係を取り結ぶが、その中でも友人関係は青年期において身近で重要な関係性といえる。したがって、友人関係を取り上げることは重要である。

しかし青年にとって家族関係も友人関係と同様に重要と考えられる。平山（2006）は、青年にとっては同性の親と友人のサポートが精神的健康の維持に重要であることを示している。青年期は、心理的離乳により依存対象が親から友人へと移行していくため、友人の重要性も高まるが、家族も依然として重要なサポート源であるといえよう。特に女子青年は、一卵性母娘、友達母娘などと表現されるように、母親との結びつきも密接に維持している可能性が考えられる。そこで、家族（親）と友人をとりあげて、これらの対象に対して泣く場合の喚起感情を検討することとした。

方法

1) 手続き

授業時間やサークル活動時間の一部を使って質問紙調査を実施した。質問紙は、(A) 友人に対して泣くものと、(B) 親に対して泣くものの2種類を用意し、各調査対象者にはいずれかをランダムに配布した。調査時期は2010年12月から2011年1月であった。

2) 被調査者

調査時に1～3年生であった女子大学生95名を対象とした。(A)に回答したものは49名、(B)に回答したものは46名であった。

3) 質問紙の構成

各質問紙の構成は以下の通りである。

(A) 友人（女性・男性）に対して泣くこと

以下の①～③を女性（同性）の友人について尋ねた後、男性（異性）の友人についても尋ねた。

①親しい友人の想起：親しい友人を1人想起させ、そのイニシャルの記入を求めた。また、以後の②③はこの人物を想定して回答するよう教示した。

②相手との親密度：IOS（Inclusion of Other in Self: IOS）尺度（Aron, Aron & Smollan, 1992）を「自分と友人」の関係に対応させて使用した。“あなたと友人との親しさについてお聞きします。以下に7種類の図があります。いずれも2つの円からできており、2つの円の重なり程度が異なります。2つの円の一方は自分、もう一方は友人と考えた場合、自分と友人との関係を最もよく表していると感じるものはどれですか”と教示し、7種類の図から一つを選択させた。7種類の図は、2つの円が接しているものから、重なり部分が徐々に大きくなり、ほとんど重なっているものまであり、これらの重なり度合いが大きいほど、親密であることを示す。

本研究では他者との関係性として、大学生が親密な関係を築いていると考えられるが、その関係性は質的に異なるであろう2つの対象、すなわち親子と親しい友人を取り上げるが、この2つの関係性には、親しさの程度の相違がないのかを確認するためにこの質問も用意した。

③相手の前で泣いた際の喚起感情：井村他（2009）の「自分が友人の前で泣くことに対する感情」に関する質問23項目を一部主語や語尾を修正して用いた（項目内容は表1参照）。原典にならない、教示は“人間関係のもつれや、失敗・挫折経験など、あなたにとって悲しくつらい出来事があったとします。その際「自分が親しい女性の友人の前で泣く」ということに対して、あなた自身はどのような気持ちや考えを持つと思いますか”とし、“全くそう思わない（1点）”から“かなりそう思う（4点）”までの4件法で回答を求めた。

(B) 親（母親・父親）に対して泣くこと

上記②と③を、母親（同性の親）について③②の順でたずねた。その後、父親（異性の親）についても同様の質問を行った。なお、文中の「友人」は、「母親」または「父親」に変更して用いた。

結果

1) 他者の前で泣いた際の喚起感情尺度の構成

同性の相手への回答、異性の相手への回答のそれぞれについて、因子分析（主成分分解）を行った。いずれの場合も、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、3因子解を採用し、promax回転を行った。因子分析の結果、いずれかの因子に対する因子負荷量の絶対値が.40以上であ

表1 同性の対象の前で泣いた際の喚起感情尺度の因子パターンならびに因子間相関 (promax回転解)

項目内容	F1	F2	F3
＜第1因子:共感期待＞			
「気分」 1) 本当の気持ちをわかってもらえる	.89	.18	-.05
「気分」 20) 自分の気持ちを受け止めてもらえる	.88	.16	.07
「気分」 6) 友人が共感してくれる	.88	.22	-.02
「気分」 9) 友人の大切さを改めて実感できる	.80	-.07	.24
「気分」 8) ありのままの自分を見せることができる	.66	-.20	.05
「気分」 15) 友人のことを信頼している証だと思う	.57	-.13	-.11
*「気分」 10) 泣いても友人にうまく理解してもらえない	-.56	.09	.20
＜第2因子:対自的傷つき＞			
「対自」 5) 自分のプライドが傷つく	-.10	.87	-.11
「対自」 14) 見られたくない一面を見せてしまう	.07	.74	.16
「対自」 11) 泣き顔をさらすのは恥ずかしい	.06	.72	.28
＜第3因子:関係懸念＞			
「関係」 21) 友人に迷惑をかけてしまう	.30	.06	.81
「関係」 19) 友人が今後も今まで通り接してくれるか不安だ	-.21	-.01	.80
「関係」 16) 友人に気をつかわせてしまう	.36	.16	.70
「関係」 7) 今後、友人が自分と距離を置くことになりそう	-.39	.15	.44
＜削除項目＞			
「対自」 4) 後々、めんどくさいことになりそう	-.48	.44	.06
「関係」 13) 友人にウザいと思われそう	-.41	-.34	.73
「気分」 22) 自分の弱い部分を見せることができる	.38	-.21	-.02
「気分」 23) 友人に心配してもらえる	.35	-.14	.16
「気分」 12) 自分の感情をぶつけることができる	.34	-.30	-.19
×「対自」 17) 友人からなぐさめられるのが嫌だ	-.47	.38	.06
×「気分」 18) 泣くことで気分が楽になる	-.13	-.79	.03
×「気分」 3) 一人で抱え込まないで済む	.38	-.52	.34
×「関係」 2) 自分自身がダメな人間に思えそう	.05	.30	.48
因子間相関	F2 対自的傷つき	-.43	
	F3 関係懸念	-.16	.29

表は同性の相手に対する評定値を用いた分析結果である。異性の相手に対する評定値を用いた分析結果もほぼ同様であった。同性の場合と異性の場合で項目構成が異なるものは削除し(表中の×印)、共通のもののみ採用することとした。

質問項目中の「友人」は、質問紙の内容に合わせて、「母親」「父親」とした。

「気分」「対自」「関係」の略記は、井村他(2009)の分類結果を示し、それぞれ「気分改善」「対自的傷つき」「関係懸念」を意味する。

*は逆転項目

ることを基準に (i.e., 各因子に対する因子負荷量の絶対値がいずれも .40未満であった項目と、複数の因子に対する因子負荷量の絶対値が .40以上の項目を除いて)、項目選択を行うこととした。当初想定していた下位概念を測定する項目群がそれぞれ因子としてまとまった。表1には、

同性の相手への回答に関する因子分析の結果を示す（項目内容には友人に対する質問を記載した）。異性の相手に対する評定値を用いた分析結果もほぼ同様の結果であった。同性の相手に関する結果と含まれる因子が異なる項目は削除し、同性・異性で共通の項目のみ採用することとした。

その結果、第1因子は他者からの共感や理解を期待する7項目から構成されていたため「共感期待」、第2因子は他者の前で泣くことで自分自身が傷つくことに言及する3項目からなるため「対自的傷つき」、第3因子は他者に負担感を与え相互の関係が変化することを懸念する4項目からなるため「関係懸念」と命名した。下位尺度得点は、評定値が高いほど当該の傾向が強いことを示すよう逆転項目の得点処理を行い、各因子を構成する項目の合計を項目数で除算して算出した。 α 係数は.74～.92であった（表2）。

2) 相手との関係性および相手の性別による差異

各下位尺度得点について、相手との関係性および相手の性別による差異を検討するため、相手との関係性（友人・親）×相手の性別（同性・異性）の2要因分散分析を行った。条件ごとの下位尺度得点の平均および標準偏差を表2に示す。

分析の結果、「共感期待」については、相手との関係性の主効果 $[F(1, 85)=14.37, \text{友人} > \text{親}]$

表2 条件別各下位尺度得点の平均および標準偏差

		友人		親	
		同性	異性	同性	異性
共感期待 (7項目) $\alpha=.87, .92$	<i>M</i>	3.24	2.77	2.80	2.36
	<i>SD</i>	0.50	0.63	0.64	0.65
	<i>n</i>	44		43	
対自的傷つき (3項目) $\alpha=.84, .83$	<i>M</i>	2.20	2.81	2.54	2.93
	<i>SD</i>	0.72	0.75	0.96	0.97
	<i>n</i>	44		44	
関係懸念 (4項目) $\alpha=.74, .84$	<i>M</i>	2.18	2.57	2.01	2.02
	<i>SD</i>	0.63	0.72	0.60	0.64
	<i>n</i>	44		43	
IOS	<i>M</i>	4.42	3.09	3.95	2.91
	<i>SD</i>	1.53	1.91	1.57	1.51
	<i>n</i>	43		43	

α 係数は、相手の性別ごとに求め、表中には同性の相手、異性の相手の順に示した。

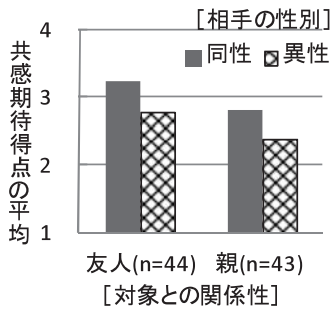


図1 相手との関係性および相手の性別ごとの共感期待得点

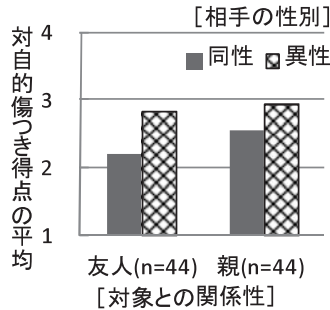


図2 相手との関係性および相手の性別ごとの対自的傷つき得点

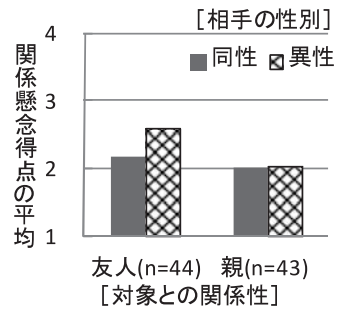


図3 相手との関係性および相手の性別ごとの関係懸念得点

および相手の性別の主効果 [$F(1, 85)=49.14$, 同性>異性] が0.1%水準で有意であった (図1)。

「対自的傷つき」については、相手の性別の主効果が0.1%水準で有意であった [$F(1, 86)=46.90$, 同性<異性] (図2)。

「関係懸念」については、相手との関係性の主効果 [$F(1, 85)=8.23$, 友人>親], 相手の性別の主効果 [$F(1, 85)=11.38$, 同性<異性], 両者の交互作用 [$F(1, 85)=9.50$] が1%水準で有意であった。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、相手が異性の場合に相手との関係性の効果が有意であった [$F(1, 170)=15.33$, $p<.01$, 友人>親]。また、相手が友人の場合に相手の性別の効果が有意であった [$F(1, 85)=20.84$, $p<.01$, 同性<異性] (図3)。

なお、相手との親密度について、相手との関係性や相手の性別により異なるのかを確認するために、相手との関係性 (友人・親) ×相手の性別 (同性・異性) の2要因分散分析を行った。その結果、相手の性別の主効果のみ有意であった [$F(1, 84)=35.36$, $p<.001$, 同性>異性]。

考察

女子青年を対象に、友人あるいは家族 (親) の前で泣いた際の喚起感情を相手の性別を考慮しながら検討した。まず、他者の前で泣いた際の喚起感情について、因子分析の結果、「共感期待」「対自的傷つき」「関係懸念」の3因子を見いだした。「共感期待」の項目構成は井村他 (2009) の「気分改善」に含まれていた項目であったが、気分が改善するという内容の項目が脱落し、全体としては他者に共感を求めるような内容の項目が残された。したがって、研究1では「共感期待」として扱うこととした。これは友人の前のみならず、親の前で泣くという状況を想定した回答が含まれていたことなど、他者の種類が複数設定されていたことによるのかもしれない。一方、「対自的傷つき」「関係懸念」については数項目が脱落したものの、ほぼ原典どおりの意味内容と考えられた。

なお、全23項目中9項目が削除されたこと、下位尺度間で構成項目数にばらつきがあること、

「気分改善」の因子が明確に現れなかったことから、研究2においては井村他（2009）の項目内容を再検討することとした。具体的には、下位尺度間の項目数を揃えるように、また原典の「気分改善」については、今回得られたのが「共感期待」という下位尺度であったことを考慮し、気分が改善するという意味を明確化し、安心感や安堵する状態をとらえられるように修正して使用することとした。

次に、対象による喚起感情の差異については、相手の性別の効果が認められた。「共感期待」は相手が異性の場合に比べて同性の場合の方が喚起されやすく、「対自的傷つき」は異性の場合に比べて同性の場合の方が喚起されにくかった。同性の相手と異性の相手では、親しさの程度も異なっており、同性の相手の方が異性に比べて親密であることが示されている。したがって、これは親しさの効果によるものかもしれない。

「共感期待」については関係性の効果も見られている。つまり、相手が親の場合に比べて友人の場合の方が共感期待が高かった。大学生の場合、親に比べて友人のほうが、日常の生活経験が類似しており、また実際の行動を共にする機会も多く、全てを語らずともその状況を理解してくれる仲間である可能性、そしてお互いのことを理解し合っている親しい友人であることが、相手にわかってもらえるという期待感を高めているのではないだろうか。これは親からの心理的自立により依存対象が親しい友人に移行してきていることの表れでもあろう。

「関係懸念」については、相手が異性の友人の場合に、他の相手の場合と比べて喚起されやすいことが示された。親との関係は一般に、血縁関係の存在や、家族として共に暮らしてきたという事実、今後もその関係が全く別のものになることはまれであることから、関係懸念が喚起されにくいと考えられる。それは父親でも母親でも大差ないといえよう。他方、友人関係は家族とは関係性の質が異なり、また、同性友人は異性友人と親密さにおいて異なり、前者は後者に比べて親しい関係にある相手であるため、関係懸念が喚起されにくかったと考えられる。なお、友人を想起する際には親しい関係の者を想定するように教示したものの、異性友人については想定範囲にはばらつきが大きく、恋人を想定した者と恋愛対象ではない友人を想定した者が混在していたと考えられる。同じ異性でも恋人か否かで関係性が異なるため、今後は両者を区別して扱う必要がある。

研究2

研究1においては、女子青年が友人または家族の前で泣いた際の喚起感情を検討したが、研究2では、青年男女が友人の前で泣いた際の喚起感情について、その性差を検討する。この際、研究1と同様に、相手の性別（同性または異性）による喚起感情の違いも比較検討する。

泣くという行為は他者に弱さを露呈することにつながるため、一般に男性に求められる性役

割からは、女性よりも男性の方が抑制しがちになると考えられる。また、対人関係上みられる性差に言及した先行研究をみると、例えば長尾・笠井・鈴木（2003）は、男性に比べて女性の方が友人への依存欲求が高いことを示し、これは社会的に女性は依存することが受容される一方で、男性は自立を求められる傾向があることによると述べている。さらに、和田（1993）によると男性の友人関係は手段的であるのに対し、女性の友人関係は情動的であるという。よって、女性と男性では対人関係の中で他者に期待することや対人関係の持ち方が異なり、他者の前で泣いた際に喚起される感情も異なることが予想される。井村他（2009）の研究では女子学生を主な対象として検討していたが、男子学生も取り上げて性差に関する比較検討を行うことで、それぞれの特徴をより明確にできると考えられる。

なお、相手が異性の場合は、「恋人」であるか「友人」であるかという関係性の違いを考慮する必要がある。高坂（2010）は、友人に対するさまざまな期待を検討し、異性友人と恋人で各期待をかける程度が異なることを示している。例えば、信頼を寄せ、理解してくれること、支援してくれることへの期待は、異性友人よりも恋人に対しての方が高いという。恋人は異性友人に比べて特別な存在として位置づけられていることがうかがわれ、日常的にも感情の共有が多い可能性が推察される。よって、同性友人の前で泣いた場合と比較した結果は、恋人が相手の場合と異性友人が相手の場合とは異なることが予想される。また研究1においては、両者の区別をすることなく、異性の親しい友人として検討してきたが、結果からは区別の必要性が示唆された。そこで研究2では、異性の相手について恋人と異性友人を区別し、それぞれについて同性友人の前で泣いた場合との比較で喚起感情の差異を検討することとする。

方法

1) 手続き

質問紙調査を行った。講義時間の一部を利用して集団実施したほか、大学祭に訪れた大学生に個別に協力を依頼、あるいは知人を介して協力を依頼した。調査時期は2011年10月中旬～11月上旬であった。

2) 質問紙の構成

質問紙は主に、(A)「同性の友人」について尋ねる質問群と、(B)「異性の友人、または、恋人」について尋ねる質問群で構成されていた。

(A) 同性の友人に対して泣くこと

①友人の想起：友人を1人想起させ、そのイニシャルの記入を求めた。また、以後の②③はこの人物を想定して回答するよう教示した。

②心理的距離：金子（1991）の心理的距離尺度についての10項目を用いた。これは「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く

親密で理解しあった関係を持っていると感じているかの度合い」を測定するものである。“あなたとその友人との親しさについておききします”と教示し、各項目について“全くそう思わない（1点）”から“かなりそう思う（4点）”までの4段階で回答を求めた。

相手との親しさという要因は、対人行動を扱う研究においては頻繁に考慮される重要な要因である。そこで、研究2ではこの質問への回答を用いて、相手との親しさの自己評定が一定以上の値である状態を保証することとした。

③他者の前で泣いた際の喚起感情：研究1の結果を踏まえ、井村他（2009）の「自分が友人の前で泣くことに対する感情」に関する項目を修正した24項目を用いた（表3参照）。項目の修正方針は、下位側面の項目数のばらつきを是正すること、わかりにくい文言を修正すること、また、「気分改善」と同等の因子を抽出するために、共感期待に偏らず、安心感や安堵感を得るといった内容の項目を工夫すること、であった。教示および回答形式は研究1と同様であった。

(B) 異性の友人または恋人に対して泣くこと

上記①で想起した人物が「友人」か「恋人」かを特定するための質問を1つ追加した以外は、「同性の友人」について尋ねた内容と同様であった。

(C) 自己の泣き経験

泣き経験に関する青年期の傾向をつかむため、補足の質問として、高校生以降に泣いた経験について尋ねた。具体的な質問内容は、泣く頻度、それが人前だった回数、誰の前で泣くことが多いか、涙もろい方か、どのような種類の泣きの経験が多いか、というものであった。

これらの項目群については本研究の主目的からは逸れるため、本論では分析対象外としたが、資料として巻末に結果の概要を載せる。

3) 被調査者

大学生340名（女181名，男159名）であった。年齢平均は19.96（ $SD=1.42$ ）で、年齢範囲は18歳～25歳であった。異性に対する質問について、「友人」を想定したものは201名（女110名，男91名）、「恋人」は112名（女60名，男52名），不明27名であった。

表3 同性の友人の前で泣いた際の喚起感情尺度の因子パターンならびに因子間相関 (promax回転解)

項目内容	F1	F2	F3
<第1因子:対自的傷つき>			
「対自」 3) 友人の前で泣いてしまったことが腹立たしい	.79	.04	-.02
「対自」 11) 友人に泣き顔をさらすのは恥ずかしい	.77	-.02	-.11
「対自」 5) 自分のプライドが傷つく	.77	-.07	.00
「対自」 24) 友人の前で泣いてしまったことを、不本意だと思う	.68	-.13	.13
「対自」 22) 自分がみじめに思える	.67	-.07	.14
「対自」 14) 見られたくない一面を見せてしまい、悔しい	.66	-.21	.01
「関係」 17) 友人から同情されそうで嫌だ	.49	-.11	.26
「対自」 9) 泣くことで気分が不愉快になる	.47	-.35	.15
<第2因子:安心・安堵>			
「安心」 15) 自分が友人を信頼していることが再確認される	.19	.73	-.11
「安心」 20) 泣くことで、自分の気持ちを受け入れてもらえる気がする	.06	.68	.05
「安心」 8) ありのままの自分を見せることができ、ホッとする	-.17	.66	.04
「安心」 23) 心の中にあつた不快な気持ちが軽減される	-.17	.65	.23
「安心」 1) 友人に心配してもらえる気がする	.27	.63	-.33
「安心」 12) 自分の感情を出せて、スッキリとした気持ちになる	-.28	.60	.00
「安心」 18) 泣くことで気分が楽になる	-.32	.59	.32
<第3因子:関係懸念>			
「関係」 7) 今後、友人との関係が悪化しそうで不安だ	-.10	-.02	.79
「関係」 19) 友人が今後も今まで通り接してくれるか不安だ	.01	.00	.77
「関係」 10) 友人との関係がギクシャクしてしまいそうだ	.02	-.11	.75
「関係」 13) 友人に不快感を与えてしまいそうだ	.17	.05	.66
「関係」 4) 友人にめんどうくさい人だと思われそう	.21	-.03	.54
<削除項目>			
「安心」 6) 友人に共感してもらえる気がする	.26	.62	-.41
「関係」 16) 友人に気をつかわせてしまわないか、心配だ	.41	.40	.42
×「対自」 2) 自分自身が泣き虫に思える	.53	.28	-.02
×「関係」 21) 友人に迷惑をかけてしまいそうだ	.46	.26	.39
因子間相関	F2 安心・安堵	-.37	
	F3 関係懸念	.46	-.25

表は同性の相手に対する評定値を用いた分析結果である。異性の相手に対する評定値を用いた分析結果もほぼ同様であった。同性の場合と異性の場合で項目構成が異なるものは削除し(表中の×印)、共通のもののみ採用することとした。

質問項目中の「友人」は、異性の相手についてたずねる際には「友人(恋人)」とした。「対自」「安心」「関係」の略記は、想定していた項目分類を示し、それぞれ「対自的傷つき」「安心・安堵」「関係懸念」を意味する。

結果

1) 他者の前で泣いた際の心理的变化尺度の構成

同性の相手への回答，異性の相手への回答のそれぞれについて，因子分析（主成分分解）を行った。いずれの場合も，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から，3因子解を採用し，promax回転を行った。研究1と同様，いずれかの因子に対する因子負荷量の絶対値が.40以上であることを基準に項目選択を行ったところ，ほぼ当初想定していたとおりの項目群がそれぞれ因子としてまとまった（第1因子は「対自的傷つき」，第2因子は「安心・安堵」，第3因子は「関係懸念」）。表3には，同性の相手への回答に関する因子分析の結果を示す。異性の相手に対する評定値を用いた分析結果もほぼ同様であった。同性の相手に関する結果と含まれる因子が異なる項目は削除し，同性・異性で共通の項目のみ採用することとした。

下位尺度得点は各因子を構成する項目の合計を項目数で除算して算出した。評定値が高いほど当該の傾向が強いことを示す。 α 係数は.81～.91であった（表4）。

表4 各下位尺度得点の平均，標準偏差および α 係数

		<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
安心・安堵 (7項目)	同性	328	2.73	0.52	.81
	異性	312	2.73	0.58	.87
対自的傷つき (8項目)	同性	334	2.28	0.67	.90
	異性	312	2.41	0.72	.91
関係懸念 (5項目)	同性	337	2.06	0.59	.82
	異性	315	2.27	0.68	.87
心理的距離 (9項目)	同性	333	29.78	3.77	.82
	異性	313	27.18	5.11	.90

心理的距離尺度得点については，9項目の合計得点とした。

2) 心理的距離尺度の構成

心理的距離尺度10項目に対する同性への評定値，異性への評定値それぞれについて因子分析（主成分分解）を行ったところ，原典どおり1因子解が認められた（寄与率は同性で39.52%，異性で50.23%）。ただし，項目8「友人（恋人）に対して反発したくなる」については，異性に対する評定値の場合に，因子負荷量が-.19と低かったため，親密度得点算出の際には同性の場合も異性の場合もこの項目を削除することとした。

評定値が高いほど当該の傾向が強いことを示すよう逆転項目の得点処理を行い，9項目の合計を尺度得点とした。 α 係数は相手が同性の場合には.82，異性の場合には.90であった（表4）。

3) 心理的距離尺度得点による親しさの統制

心理的距離のばらつきを統制するため，当該の対象に対する心理的距離尺度得点が得点可能

範囲 (9~36) の中点より大きな値 (23以上) を示したデータのみを以降の分析データとして扱うこととした。この条件に合致したのは、同性友人に対する回答の95.88% (326名分)、異性友人に対する回答の77.66% (153名分)、異性恋人に対する回答の98.17% (107名分) であった。これによりさほど親しくない相手を想定した回答を分析対象外とし、一定以上の親しさの相手が想定された回答であるとみなした。

4) 被調査者の性別および相手の性別による差異

異性の相手について「友人」を想定した被調査者の回答と「恋人」を想定した被調査者の回答は別々に分析した。すなわち、(1) 同性友人と「異性友人」の間での喚起感情の比較、(2) 同性友人と「恋人」の間での喚起感情の比較を行った。

(1) 同性友人と異性友人の比較 (異性の相手が「友人」の場合の回答の分析)

「友人」を想定した被調査者の各下位尺度得点について、被調査者の性別および相手の性別による差異を検討するため、被調査者の性別 (男・女) ×相手の性別 (同性・異性) の2要因分散分析を行った。条件ごとの各下位尺度得点を図4~6に示す。

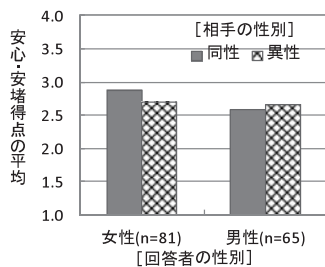


図4 回答者の性別および相手 (友人) の性別ごとの安心・安堵得点

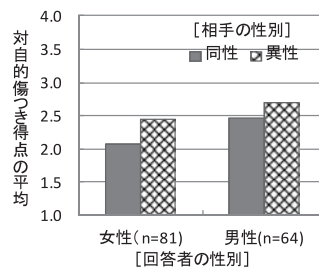


図5 回答者の性別および相手 (友人) の性別ごとの対自的傷つき得点

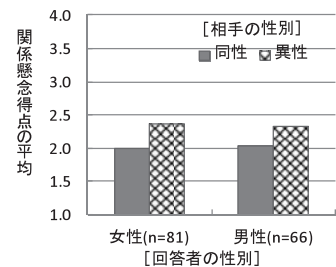


図6 回答者の性別および相手 (友人) の性別ごとの関係懸念得点

分析の結果、「安心・安堵」については、被調査者の性別の主効果 [$F(1, 144)=5.37, p<.05$, 男<女] および被調査者の性別と相手の性別の交互作用 [$F(1, 144)=14.61, p<.001$] が有意であった。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、相手が同性の場合に被調査者の性別の効果が有意であった [$F(1, 288)=13.56, p<.01$, 男<女]。また、被調査者が女性の場合に、相手の性別の効果が有意であった [$F(1, 144)=15.69, p<.01$, 同性友人>異性友人]。

「対自的傷つき」については、被調査者の性別の主効果 [$F(1, 143)=9.56, p<.01$, 男>女] および相手の性別の主効果が有意であった [$F(1, 143)=56.32, p<.001$, 同性友人<異性友人]。

「関係懸念」については、相手の性別の主効果が1%水準で有意であった [$F(1, 145)=54.69$, 同性友人<異性友人]。

(2) 同性友人と恋人の比較（異性の相手が「恋人」の場合の回答の分析）

「恋人」を想定した被調査者の回答についても同様の分析を行った（図7～9）。「安心・安堵」については、被調査者の性別の主効果 $[F(1, 101)=19.14, \text{男} < \text{女}]$ および相手の性別（ここでは「相手との関係」とよぶ）の主効果 $[F(1, 101)=17.58, \text{同性友人} < \text{恋人}]$ が0.1%水準で有意であった。

「対自的傷つき」については、被調査者の性別の主効果 $[F(1, 100)=10.78, p < .01, \text{男} > \text{女}]$ および相手との関係の主効果が有意であった $[F(1, 100)=4.91, p < .05, \text{同性友人} > \text{恋人}]$ 。

「関係懸念」については、被調査者の性別と相手との関係の交互作用が5%水準で有意であった $[F(1, 101)=5.36]$ 。単純主効果の検定を行ったところ、被調査者が男性の場合に、相手との関係の効果が有意であった $[F(1, 101)=4.48, p < .05, \text{同性友人} > \text{恋人}]$ 。

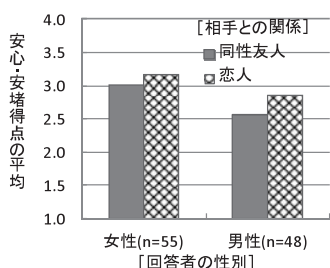


図7 回答者の性別および相手との関係（同性友人／恋人）ごとの安心・安堵得点

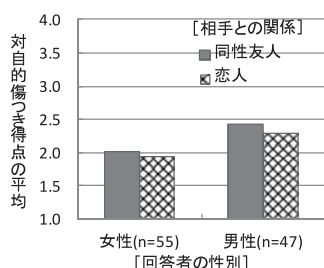


図8 回答者の性別および相手との関係（同性友人／恋人）ごとの対自的傷つき得点

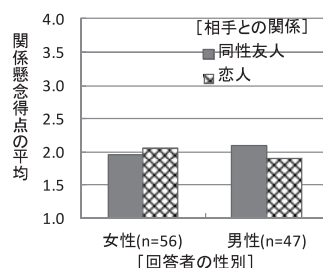


図9 回答者の性別および相手との関係（同性友人／恋人）ごとの関係懸念得点

考察

青年男女を対象に、友人の前で泣いた際の喚起感情の性差を相手の性別を考慮しながら検討した。まず、他者の前で泣いた際の喚起感情について、因子分析の結果はほぼ想定通りであり、「安心・安堵」「対自的傷つき」「関係懸念」の3因子を見いだした。

次に、泣く対象が同性友人または異性友人の場合の喚起感情に関して、泣く相手が同性の場合は異性の場合に比べて「対自的傷つき」「関係懸念」が喚起されにくいことが示された。異性の友人に対しての方がこれらを感じやすいのは、性別が異なるが故にお互いに共通理解を持つ範囲が狭くなり、理解され得ないという気持ちが強いのではないであろうか。

加えて「対自的傷つき」の喚起については性差が認められ、男性の方が女性よりも強く感じる傾向にあることが明らかになった。友人の前で泣くことは自分の弱さを露呈することになり、男性性に反する行為をしてしまった自分自身への後悔によるものだと考えられる。一方、「関係懸念」については性差がみられなかった。友人の前で泣くことで、その関係が壊れることの

心配は、性役割と直接的に関連するとは考えがたいため、男女であまり違いがないのではないだろうか。

「安心・安堵」については、女性が同性友人に対して泣く場合に最も喚起されやすい傾向が示された。相手の性別の効果に関して、女性が異性友人に対してよりも同性友人の前で泣く場合の方が安心感を得やすいという結果は、研究1の結果が再現されたと見なしうるであろう。高坂(2010)は、友人に対する期待として「信頼・支援」をあげているが、これは信頼を寄せ、理解してくれること、支援してくれることへの期待であり、本研究の「安心・安堵」につながる内容であると考えられる。そして友人への「信頼・支援」期待に関しては、女性の場合、異性友人に比べて同性友人に対しての方が高いことが示されている(高坂, 2010)。本研究における女性の「安心・安堵」喚起で認められた相手の性別による差異は、これに対応する結果といえよう。また、男性が友人に対して「信頼・支援」を期待する程度については、友人が同性か異性では違いが認められていない(高坂, 2010)。これは本研究で男性の「安心・安堵」の喚起に相手の性別による差がみられなかったことと整合するといえよう。「対自的傷つき」は男性の方が喚起されやすかったことも合わせて考えると、男性で「安心・安堵」が低かったのは、相手が同性であろうが異性であろうが友人の前で泣くこと自体に抵抗感・嫌悪感を抱くこととなり、女性に比べて安心感を得にくいためだと考えられる。

最後に、泣く対象が同性友人または恋人の場合の喚起感情に関しては、「安心・安堵」「対自的傷つき」で性差が認められ、男性に比べて女性は前者を喚起しやすく、後者を喚起しにくいことがわかった。さらに、相手が恋人である場合は同性友人である場合よりも、「安心・安堵」が喚起されやすく、「対自的傷つき」が喚起されにくい傾向にあることが示された。性差については性役割意識に基づくものと思われる。つまり、他者への依存が許容されがちな女性の場合は、自立が求められる男性に比べて(長尾他, 2003)、自己の傷つきが少なく、結果安心感や安堵感も得やすいのではないだろうか。また相手による喚起感情の差違は、各対象が青年にとってどのような存在であるのかを反映した結果と考えられる。

「関係懸念」については、男性においてのみ相手の効果がみられ、恋人の場合には同性友人の場合に比べて喚起されにくいことが示された。恋人は男性にとって弱さを見せられる関係にある貴重な存在であることがうかがえる結果といえよう。

まとめ

本研究では青年期の泣きについて、泣くことの対人機能を重視し、単に泣くという状況ではなく、他者前で泣くという状況に焦点を当てて、この際に喚起される感情について泣く相手との関係性や性別の違いによる差異を検討した。

青年期の男女が他者の前で泣いた際の喚起感情は、相手との関係性や相手の性別によって異なることが示された。研究1からは、女子青年の場合、「共感期待」は家族よりも友人に対して感じる傾向にあり、「対自的傷つき」は家族か友人かでは変わらないが、いずれも相手の性別ひいては相手と親密度が高い場合に肯定的な方向の反応を示すことが示された。「関係懸念」については検討した4種類の相手の中では最も関係性が薄いと考えられる異性友人に対してより強く喚起されることがわかった。家族と友人の比較については、男性の結果が得られていないが、女性と対応する傾向にあるのかを今後確認していくことは、青年男女の母親・父親への期待を反映する結果として興味深いと思われる。

研究2では、女性の友人に対しての泣きについて研究1の結果が再現されたといえる。回答者の性差については、男性は女性よりも「対自的傷つき」を感じやすく、「安心・安堵」を感じにくいことが示され、これは泣くことは他者に自分の弱さを露呈することにつながるためではないかと考えられた。「関係懸念」については性差がみられず、泣いた結果相手との関係に変化が生じる可能性の想定は男女で変わりないものと思われる。相手の性別を考慮した結果の大きな傾向としては、恋人、同性友人、異性友人の前から順に「対自的傷つき」を感じにくく、「安心・安堵」を感じやすい傾向にあることが示された。これらの喚起感情については、相手とどの程度の相互依存関係にあるかに左右されている可能性があるだろう。そしてこの結果は、各対象の前で泣くことをどの程度自分に許せるのかを表すものともいえ、また、各対象が自己のサポート源としてどれくらい機能する可能性があるかの期待とも考えられる。

なお、他者の前で泣いた際の喚起感情として本研究では、井村他（2009）にならい、「共感期待」/「安心・安堵」、「対自的傷つき」、「関係懸念」を取り上げたが、一人で泣く場合も含めた泣いた後の心理的变化や思考についての研究では、「意欲の高まり」（澤田・松尾・橋本，2012）や「前向き変化」（和田，2011）といった本研究で取り上げられたものとは異なる側面も見いだされている。また、今回は泣く相手に共通してみられたもののみを取り上げたが、泣く対象に特有の喚起感情が存在する可能性も否定できない。今後、他者の前で泣くことによって喚起される感情をより網羅的にとらえるためには、これらの点を再検討する必要があるだろう。

本研究では、質問紙調査への回答をもとに、他者の前で泣いた際に喚起される感情についての検討を行ってきた。このため、実際に泣いたときの喚起感情を忠実にとらえられているとは言いがたい。特に男性については、一般に他者の前で泣くことが少ないことを考えると、人前で泣いた状況の想起が困難であった可能性もある。しかし、本研究の結果は、少なくとも人前で泣いた際の喚起感情についての認識を明らかにすることはできたといえよう。本邦においては特に、青年期以降の泣くという経験を主題とした研究は未だ少なく、近年精力的に研究が進められているところである（e.g., 澤田他，2006, 2007）。このような中で本研究は、青年期における泣きの様相の解明に寄与するものと考えられる。

引用文献

- 有田秀穂 (2007). 涙とストレス緩和 日本薬理学雑誌, **129**, 99-103.
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Bylsma, L. M., Croon, M. A., Vingerhoets, A. J. J. M., & Rottenberg. (2011). When and for whom does crying improve mood? A daily diary study of 1004 crying episodes. *Journal of Research in Personality*, **45**, 85-392.
- 堂周平 (2012). 泣くことによって生じる心理的变化の研究—PAC分析によるイメージの調査から— 追手門学院大学心理学論集, **20**, 1-11.
- Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1993). Interpersonal and intergroup communication in Japan and the United States. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Communication in Japan and the United States*. Albany, NY: State University of New York Press. Pp.149-214.
- 橋本巖・澤田忠幸・松尾浩一郎・武知幸恵 (2006). 青年における泣きの対人的表出制御と関連要因の検討—「ひとりになって泣くこと」と「人前で泣くこと」— 愛媛大学教育学部紀要, **53**, 45-55.
- 平山聡子 (2006). 高校生の精神的健康と情動制御および家族・友人関係 人間文化論叢 (お茶の水女子大学), **9**, 369-375.
- 井村美保・生塩詞子・藤原珠江 (2009). 青年期における「泣き」の抵抗感と喚起感情に関する考察—友人関係の持ち方の側面から— 長崎純心大学心理教育相談センター紀要, **8**, 57-70.
- 稲嶺麻希子・遠藤光男 (2009). 感情の表情表出における状況と性別の効果—日本人大学生での検討— 感情心理学研究, **17**, 134-142.
- 井上弥 (2000). 感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果 感情心理学研究, **7**, 25-31.
- 金子俊子 (1991). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, **3**, 10-19.
- 菊池章夫・堀毛一也 (1994). 社会的スキルの心理学—100のリストとその理解— 川島書店
- 高坂康雅 (2010). 大学生における同性友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 パーソナリティ研究, **18**, 140-151.
- 長尾あゆみ・笠井仁・鈴木伸一 (2003). 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **2**, 22-35.
- Saarni, C. (1984). An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*, **55**, 1504-1513.
- 澤田忠幸・橋本巖・松尾浩一郎 (2006). 青年期における直接的・代理的場面での「泣き」の経験—男女差および共感性, ストレス・コーピングとの関連に焦点を当てて— 愛媛県立医療技術大学紀要, **3**, 1-8.
- 澤田忠幸・橋本巖・松尾浩一郎 (2007). 青年期における直接的泣きおよび代理的泣きの経験尺度の検討—共感性およびストレス対処との関連における男女差を含めて— 愛媛県立医療技術大学紀要, **4**, 1-8.
- 澤田忠幸・松尾浩一郎・橋本巖 (2012). 成人期における“泣くこと”による心理的变化 心理学研究, **82**, 514-522.
- Van Tilburg, M. A. L., Unterberg, M. L., & Vingerhoets, A. J. J. M. (2002). Crying during adolescence: The role of gender, menarche, and empathy. *British Journal of Developmental Psychology*, **20**, 77- 87.
- 和田実 (1993). 同性友人関係—その性および性別役割タイプによる差異— 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 和田成美 (2011). 直接的泣き体験に関する心理尺度開発の試み 追手門学院大学心理学論集, **19**, 33-41.

注

- 1) 本論文は, 第二・第三著者 (2011年度宮城学院女子大学心理行動科学科卒業生) が第一著者指導のもと, 卒業研究において収集したデータを第一著者が再分析し, 執筆したものである。

付録

研究2において, 質問紙に含まれていた補足質問についての集計結果を以下に示す。

「高校生になってから今まで」の期間について, どのくらいの頻度で泣くかを尋ねた結果が付表1で

ある。 χ^2 検定 ($\chi^2_{(3)} = 82.9, p < .01$) および残差分析の結果、男性では泣く頻度が低く、女性では高いことが示された。

付表1 泣く頻度

		ほとんど泣かない	年に1~2回	月に1回	週に1回以上	合計
男性	度数	63	63	22	2	150
	(%)	(42.0)	(42.0)	(14.7)	(1.3)	(100.0)
女性	度数	18	48	92	20	179
	(%)	(10.1)	(26.8)	(51.4)	(11.2)	(100.0)

付表2は、この1年間に人前で泣いた回数を集計したものである。 χ^2 検定 ($\chi^2_{(4)} = 78.88, p < .01$) および残差分析の結果、男性では人前で泣いた回数が少なく、女性では多いことが示された。

付表2 1年間に人前で泣いた回数

		0回	1回	2~4回	5~10回	11回以上	合計
男性	度数	85	27	26	11	2	151
	(%)	(56.3)	(17.9)	(17.2)	(7.3)	(1.3)	(100.0)
女性	度数	25	31	58	44	21	179
	(%)	(14.0)	(17.3)	(32.4)	(24.6)	(11.7)	(100.0)

付表3は、人前で泣いた経験をもつ者に対して尋ねた追加質問（誰の前で泣くことが多いか）への回答結果を集計したものである。当てはまるもの1つを選択させた。「その他」のカテゴリをのぞいた χ^2 検定 ($\chi^2_{(6)} = 61.34, p < .01$) および残差分析の結果、友人を選択した女性において、家族あるいは友人の前で泣いたことが多く、恋人を選択した場合は、男女とも恋人の前で泣いたことが多かった。

付表3 泣いた対象（最も多い対象を一つ選択）

[泣いた対象]		家族	友人	恋人	その他	合計
＜異性の対象として友人を選択した被調査者＞						
男性	度数	7	20	5	4	36
	(%)	(19.4)	(55.6)	(13.9)	(11.1)	(100.0)
女性	度数	29	56	1	3	89
	(%)	(32.6)	(62.9)	(1.1)	(3.4)	(100.0)
＜異性の対象として恋人を選択した被調査者＞						
男性	度数	7	7	13	2	29
	(%)	(24.1)	(24.1)	(44.8)	(6.9)	(100.0)
女性	度数	8	18	29	0	55
	(%)	(14.5)	(32.7)	(52.7)	(0.0)	(100.0)

付表4は、自分自身を涙もろいと思うかどうかを尋ねた結果である。 χ^2 検定 ($\chi^2_{(1)} = 30.87, p < .01$) および残差分析の結果、涙もろいと思う者は、女性で期待値よりも多く、男性では期待値よりも少ないことが示された。

付表4 涙もろいと思うか

		はい	いいえ	合計
男性	度数	76	76	152
	(%)	(50.0)	(50.0)	(100.0)
女性	度数	143	38	181
	(%)	(79.0)	(21.0)	(100.0)

付表5は、どのような泣きの経験が最も多いかを尋ねた結果である。当てはまるもの一つを選択させた。一定以上の度数が認められた「笑い泣き」「感動の涙」「悲し泣き」「悔し泣き」のカテゴリについて χ^2 検定を行った結果、有意傾向が示された ($\chi^2_{(3)} = 7.24, p < .10$)。残差分析の結果、「悲し泣き」について男性の度数が低く、女性の度数が高いという傾向が示された。

付表5 泣きの種類（最も多いものを1つ選択）

		嬉し泣き	笑い泣き	感動の涙	悲し泣き	悔し泣き	苦痛の涙	安心の涙	合計
男性	度数	1	13	60	28	37	5	1	145
	(%)	(0.7)	(9.0)	(41.4)	(19.3)	(25.5)	(3.4)	(0.7)	(100.0)
女性	度数	2	10	64	58	42	0	0	176
	(%)	(1.1)	(5.7)	(36.4)	(33.0)	(23.9)	(0.0)	(0.0)	(100.0)

A preliminary study of emotional crying in the presence of other person: The affective effects in terms of the target person and gender.

Kazuyo KINO, Misaki SATOH, and Mizuho WADA

The purpose of this study was to investigate how the adolescents' affects when they cried emotionally in the presence of other person were differ in terms of the target person and gender. In the study 1, female undergraduates were asked to complete a set of questionnaire about affective arousal when they cried emotionally in front of a target person and their interpersonal closeness with the target. The target condition was their parents (mother and father) or close friends (same sex and opposite sex). The results suggested that expectation of empathic understanding in the same sex target condition was aroused stronger, and self-hate was aroused weaker than in the opposite sex target condition. In addition, expectation of empathic understanding was stronger when they cried in front of their friends than parents. Their anxiety for deterioration of the relationship was aroused the strongest in front of the friends with the opposite sex. In the study 2, both male and female undergraduates completed a questionnaire about affective arousal when they cried emotionally in front of their friends with the same/opposite sex. In the opposite sex condition, we distinguished whether the target was her/his lover or not. The result showed that the male participants felt stronger in self-hate and weaker in relief than the female participants did. The gender difference in the anxiety for deterioration of the relationship was not found. In addition, it was suggested that the participants felt more relieved and less self-hate when cried in front of their each lover. Discussed are some contributions for future research in terms of adolescents' emotional crying.